

## キャリア・パスポートの効果的な活用を目指して

— 自己理解を深め、自己肯定感を高めるために —

大嶋 慧（京都市総合教育センター研究課 研究員）

**key Words :** キャリア・パスポート, 成長ノート, 自己理解能力, 自己肯定感, 肯定的な言葉かけ

様々な調査から、日本の子どもたちの「自己肯定感」は諸外国と比べて低いという結果が示されている。子どもの「自己肯定感」が低く、自分に対して自信がないままでは、変化の激しいこれから社会で、変化に対応して生きていくのに必要な資質・能力を十分獲得できないだろうと考えられる。子どもたちが主体的に自信をもって行動し、よりよい社会の担い手となるために、キャリア教育を要とし、必要な資質・能力を培うことが必要である。

キャリア・パスポート(本市では、生き方探究パスポート)を使った活動は、学年初めと終わりに特別活動等の時間で行うことが考えられるが、これだけでは不十分であると考え、活動の間をつなぐ取組として「成長ノート」を使った活動を考えた。

このノートの特長は、子どもたちが自信をもって次の行動に対する意欲を喚起するために短期的な振り返りと次の見通しをもつこと、友だちや教師などから肯定的な言葉かけを記載できるようにしていることである。

このような取組を積み重ねることで、自分のよさを改めて発見するなど、望ましい自己理解をすることができ、子どもたちの「自己肯定感」を高めることにつながった。

## 目 次

はじめに ..... 1

**第1章 今、求められるキャリア教育****第1節 キャリア教育の必要性**

- (1) 小学校におけるキャリア教育の位置付け 1
- (2) キャリア教育で育む資質・能力 ..... 1

**第2節 本研究の構想**

- (1) 本研究の全体像 ..... 2
- (2) キャリア・パスポート ..... 3

**第2章 キャリア・パスポートの  
効果的な活用を目指して****第1節 キャリア・パスポートの活用**

- (1) キャリア・パスポートの  
効果的な活用に向けて... 4
- (2) キャリア・パスポートの具体 ..... 4
- (3) 成長ノートの具体 ..... 5

**第2節 多角的視点から自己理解を促す方策**

..... 6

**第3章 実践について****第1節 キャリア・パスポート はじめ ..... 7****第2節 行事でつなげる 成長ノート**

- (1) 学校行事で付けたい力を明確に ..... 9
- (2) 成長ノートで振り返る ..... 9

**第3節 キャリア・パスポート おわり ..... 13****第4章 研究の成果と今後の課題****第1節 研究の成果・今後の課題について**

- (1) 児童の実態から ..... 14
- (2) 児童アンケートから ..... 15
- (3) 研究協力員ヒアリングから ..... 17

**第2節 さらに充実を求めて**

- (1) 成長ノート ..... 18
- (2) 各教科・領域の振り返りと  
成長ノートをつなぐ ... 18
- (3) 肯定的な言葉がけ ..... 18

**おわりに ..... 18**


---

<研究担当> 大嶋 慧 (京都市総合教育センター研究課研究員)

<研究協力校> 京都市立岩倉北小学校  
京都市立西大路小学校

<研究協力員> 葉山 智子 (京都市立岩倉北小学校教諭)  
後藤 文博 (京都市立岩倉北小学校教諭)  
大西 裕樹 (京都市立西大路小学校教諭)



## はじめに

現代社会は、急速なグローバル化の進展や人工知能(AI)の飛躍的な発達などにより、その変化は加速度を増し、今後を予測することが困難な時代を迎えている。そのような中、これらの変化に対応しながら生きていくためには、自分に自信をもち、意欲的に学び続ける力がますます必要である。

今までからも様々な調査により、若者たちが学ぶことや働くことの意義を見出せないこと等が、喫緊の課題となっている。

これらの課題を踏まえて、新学習指導要領「総則」では、キャリア教育の充実を図ること<sup>(1)</sup>が示された。

これまでもキャリア教育の重要性については言及されてきたが、キャリア教育を通して、「どのような力を育成するのか」「どの教科のどの時間で付きたい力を育成するのか」また、「どのように指導するのか」など、曖昧なまま指導されてきたことが多かった。そこで、本研究では、これらのことを解決するために、キャリア・パスポートの効果的な活用の在り方について研究を進めた。

(1) 小学校学習指導要領 解説 総則編 東洋館出版

2018年3月31日 P. 23

## 第1章 今、求められるキャリア教育

### 第1節 キャリア教育の必要性

#### (1) 小学校におけるキャリア教育の位置づけ

新学習指導要領「総則」において、特別活動を要として、学校の教育全体を通してキャリア教育を適切に行うこと<sup>(2)</sup>が示されたことから、特別活動に学級活動<sup>(3)</sup>に「一人一人のキャリア形成と自己実現」の項目が新たに設定された。このことによって、小・中・高等学校をつなぐキャリア教育の指導の系統性が明確になった。

これは、個々の子どもの将来に向けた自己実現に関わるものであり、一人一人の主体的な意思決定に基づく実践までつなげることをねらいとしている。この時間を活用し、自己のキャリアやこれまでの活動を振り返り、これからの学びや生き方を見通すことで、学校の教育活動全体の取組を通じて、キャリア教育で必要な資質・能力の育成を図っていくことができると考えられる。また、小学校でのキャリア教育では、子どもたちに具体的

な将来を設計させることは中心の課題ではなく、その基盤の形成に向けた指導・支援が大切である。

小学校の時期は、身近な人から集団へと人の関わりを広げながら、働くことの意義を理解し、自分の役割を主体的に果たそうとする態度を育成する時期である。また、日常の生活や学習に目標を立て、努力して達成しようとしたり、自分の特長に気づき、自分のよいところを伸ばそうとしたりする時期である。

そのため、学校教育全体において、様々な人と関わりながら、人のために働くことの意義を理解することや、自分ができることや、したいことを理解し、行動すること、これから学ぶことの意欲につなげることが大切である。

#### (2) キャリア教育で育む資質・能力

中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(以下「在り方答申」という)では、キャリア教育について次のように示している。<sup>(3)</sup>

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

キャリア教育とは、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てること。キャリア発達を促す教育ということになる。一人一人の社会的・職業的自立に向けて、必要な基盤となる能力とは、「在り方答申」に4つの能力として示されている、この4つの能力を整理したものを以下に示す。<sup>(4)</sup>

##### ○人間関係形成・社会形成能力

「人間関係形成・社会形成能力」は、多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力である。

##### ○自己理解・自己管理能力

「自己理解・自己管理能力」は、自分が「できること」「意義を感じる」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力である。

### ○課題対応能力

「課題対応能力」は、仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力である。

### ○キャリアプランニング能力

「キャリアプランニング能力」は、「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力である。

この4つの能力は、それぞれ独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にある。このため、特に順序があるものではなく、すべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けさせることを求めるものでもない。これらの能力をどのようなまとまりで、どの程度身に付けさせるのかは、学校や地域の特色、子どもの発達の段階によって異なると考えられる。各学校においては、この4つの能力をふまえて学校の実態に応じた具体的な能力を設定し、キャリア教育を通して、育成を目指すことが大切である。

キャリア発達<sup>6)</sup>については「在り方答申」では、

社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程

と述べられているように、キャリア教育を通して、社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育成すると同時に、一人一人の児童が自分のよさや可能性を認識できるような支援を行うことが重要である。

## 第2節 本研究の構想

### (1) 本研究の全体像

前節でも述べたように、これからの時代に生きていく子どもたちは、社会的・職業的自立に向け、必要な「基礎的・汎用的能力」を獲得することが重要となる。そのためには、「自己肯定感」を高めることの必要性に着目した。

過去の様々な調査により、日本の子どもたちの「自己肯定感」は諸外国の子どもたちと比べて、低いという結果が示されている。

平成26年内閣府が行った、満13歳～29歳の若者を対象にした調査「今を生きる若者の意識一

際比較からみえてくるもの」<sup>6)</sup>では、下記のような結果であった。

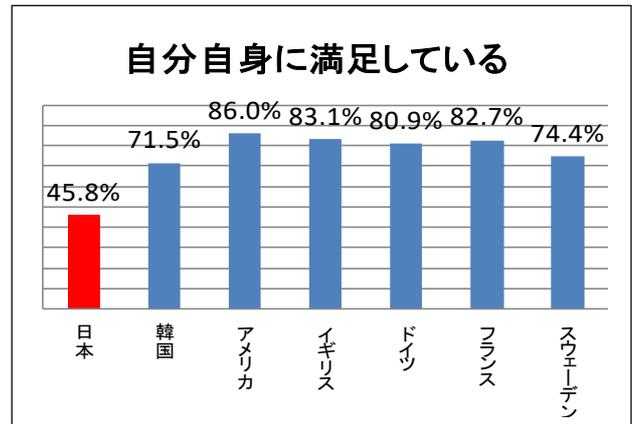


図1-1 今を生きる若者の意識

—国際比較からみえてくるもの—

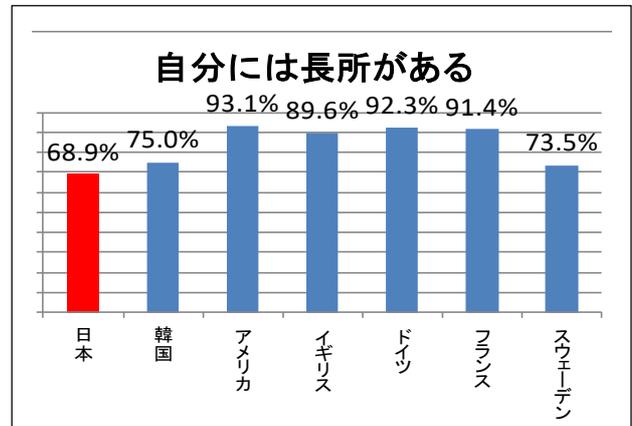


図1-2 今を生きる若者の意識

—国際比較からみえてくるもの—

両項目のいずれもが、諸外国と比べて低く、日本の若者の「自己肯定感」が低いことが言える。「自己肯定感」が低いままでは、「自己有用感」を味わうことも、自信をもって意欲的に活動できないのではないだろうか。

そこで、「自己肯定感」とキャリア教育で育む資質・能力との関係を見ると、「自己肯定感」が育つと、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動できるようになると考えられる。

そこで、キャリア教育で育む資質・能力のうちの「自己理解能力」に注目をした。つまり「自己肯定感」を得るためには、肯定的で確かな「自己理解能力」を培うことが基盤になると考えた。

「自己理解能力」とは、どのようなものだろうか。「在り方答申」で述べられている、基礎的・汎用的能力<sup>6)</sup>を基にすると、「自己理解能力」とは、自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、

- ・自分のよさを知り，得意なことをのばす力
- ・自分らしさを大切にする力

ということになる。

肯定的に自己理解を深めることは，現在の自己を適切に知ることになり，自分に合った目標をそれに合わせて設定できるようになる。そのことによって，目標が達成できる場面が多くなると，自分に自信がもてるようになってきたり，「自己有用感」が向上したりして，結果として「自己肯定感」の高まりにつながると考える。

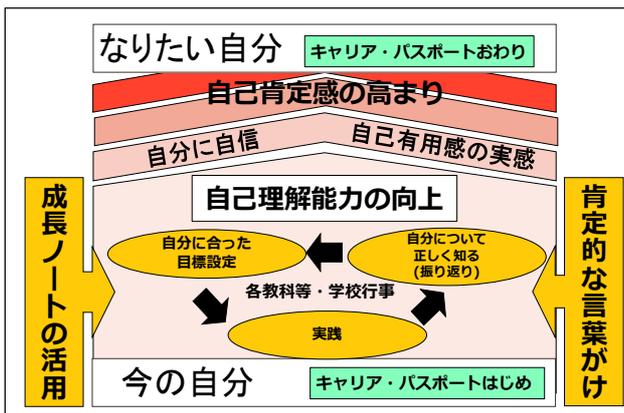


図 1-3 本研究で考える「自己肯定感」を高めるプロセス

確かな自己理解を深めることができるようになると，なりたい自分(最終目標)を実現するための目標が段階的に立てられるようになる。まず，1つの目標が達成できれば，自分に自信がもてたり，「自己有用感」が実感できたりする。それが，次への活動の意欲を高めることになる。この繰り返しのよって自分に自信がもてたり，「自己有用感」を実感できたりすることを積み重ねることで，「自己肯定感」が高まることにつながると考えた。

本年度の研究はキャリア教育の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤になる能力のうち「自己理解能力」の向上と「自己肯定感」を高めることに視点を当てることによって，キャリア・パスポートの効果的な活用につなげたい。

## (2) キャリア・パスポート

今回新たに設定された学級活動(3)の指導について，学習指導要領第6章の第2の3の(2)では

学校，家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て，学んだことを振り返りながら，新たな学習や生活への意欲につなげたり，将来の生き方を考えたりする活動を行うこと。その際，児童が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること。

示されている。(8)

これまでも学級活動などにおいて，「児童が自ら現在及び将来の生き方を考えることができるよう工夫すること」とされていたが，今回，教材等の活用について新たに示されたことでキャリア教育の具体的な教材について示された。

具体的な教材等については，一連の活動の過程において，子どもが気付いたことや考えたこと，体験したこと，学んだことなどを記述し，積み重ね，振り返ることができるポートフォリオのようなものである。「キャリア・パスポート」を使った学習を行う際に必要なものとされている。これらを踏まえて，文部科学省『キャリア・パスポート』について(平成31年3月29日告示)では，キャリア・パスポートの定義やキャリア・パスポートの具体が示された。キャリア・パスポートの定義では，

自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら，自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオ

と示された。(9)つまり，キャリア・パスポートは，児童が学びのプロセスを振り返ることを通して，自らの成長や変容を自己評価し，自己理解を深め，主体的な学びに向かう力を育て，自己のキャリア形成に生かすために活用するものである。

京都市では，これらの取組の学年のはじめと学年のおわりを振り返る2枚の振り返りシートを「生き方探究パスポート(京都市版キャリア・パスポート)」として実施されることになった。

(2) 前掲(1) P. 23

(3) 中央教育審議会答申「今後におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」 2011年1月31日 P. 17

(4) 前掲(3) P. 25

(5) 前掲(3) P. 17

(6) 内閣府「今を生きる若者の意識—国際比較からみえてくるもの—」2015年

(7) 前掲(3) P. 25

(8) 前掲(1) P. 185

(9) 文部科学省「キャリア・パスポート」について 2020年3月29日

## 第2章 キャリア・パスポートの 効果的な活用を目指して

### 第1節 キャリア・パスポートの活用

#### (1) キャリア・パスポートの

##### 効果的な活用に向けて

キャリア・パスポートを活用した実践は、特別活動学級活動(3)の時間を活用し、行うようにした。しかしながら、自己のキャリア形成について見通したり、振り返ったりするためには、特別活動で扱える時数だけでは足りないのではないかと考える。そのため、特別活動を要として各教科等の特質に応じて、教育活動全体でキャリア教育の充実を図ることが重要になる。そのため、特別活動学級活動(3)だけではなく、各教科等における活動が大切になる。

本研究では、キャリア・パスポートの取組を充実するためには、キャリア・パスポートの「はじめ」と「おわり」の間をつなぐ「成長ノート」を活用することが重要であると考えた。以下の図2-1は「成長ノート」の活用のイメージである。

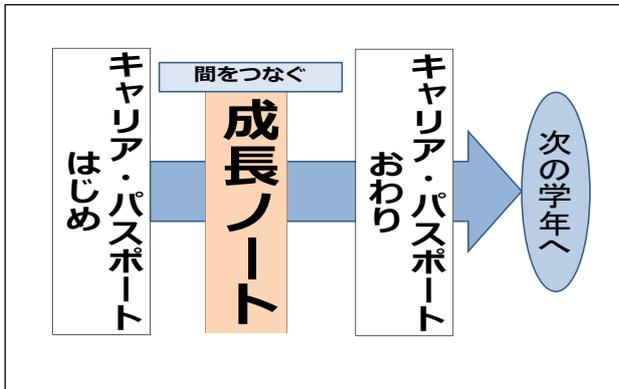


図2-1 「成長ノート」の活用について

この「成長ノート」とは、各教科等での活動での学びをキャリア教育で付けたい力について振り返ったものを蓄積したノートである。

これまで、キャリア教育で付けたい力については、各教科や様々な活動を通して、付けようとしてきたことが多かった。しかし、これらは単発的に指導していたり、子どもがキャリア教育で付けたい力を意識してめあてをもち、振り返ることをしていなかったりしたことが多かった。

学習指導要領解説特別活動編の第2各活動・学校行事の目標及び内容3内容の取扱いは

指導に当たっては、学校、家庭及び地域における学習と生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うこと。その際、児童が活動を記録し、蓄積する教材等を活用すること（下線部は筆者によるもの）

と示されている。(10)

このように、学習と生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動をつなぐことがとても重要になってくることが分かる。

キャリア・パスポートを効果的に活用するためには、子どもが学校行事などの活動の様子を記録し、蓄積するものとして「成長ノート」を活用した取組を行った。この「成長ノート」を使用した具体例は後述するが、キャリア・パスポートの「はじめ」と「おわり」を有機的につなぐためには、間をつなぐ一つの取組を行った後の振り返りを次の活動での「めあて」を考える際に参考にしていくようにした。

#### (2) キャリア・パスポートの具体

次ページに示した図2-2、図2-3は、実践で使用するキャリア・パスポートである。文部科学省が提示したキャリア・パスポート例(11)を参考に「自己理解をする」という視点で再構成した。京都市で行われる「生き方探究パスポート(京都市版キャリア・パスポート)」も同様の構成になっている。

図2-2の学年はじめのキャリア・パスポート「はじめ」では、これまでの自分について振り返り、今の自分についてや将来の自分について考え記述する。自分の好きなことや自分のよいところなどについて考えることで、今の自分について自己理解ができると考える。1年後になりたい自分について考えたり、そのために頑張ることについて考え、意思決定したりすることで意欲的に目標を考えることが出来るようになる。

キャリア・パスポートおわりでは、1年間を通して、自分がどのようなことで成長したかを具体的に振り返ることができるようにした。それらをもとに次の学年へのなりたい自分について考えるようにする。

図2-2はキャリア・パスポートのはじめである。

5年生 はじめ		【名前	
○今の気について考えよう！！			
とくいなこと・すきなこと	今、大切にしていること・もの		
4年生でがんばっていたこと	自分のよいところ		
しょう来の夢(やってみたいこと・やってみたい仕事・こんな人になりたい)			
○この1年間でがんばりたいこと、チャレンジしたいこと			
こんな 自分に なるぞ！	そのために することは		
➡			
先生から	おうちの時から		

図2-2 キャリア・パスポート 5年 学年はじめ

図2-3は学年末で行うキャリア・パスポートおわりである。

5年生 おわり		【名前	
○なりたい自分にだけだけ選べたか、ふりかえりましょう！！			
自分の成長したことについて忘れられない！残しておきたい！！（思い出・出来事・出会い）			
なりたい自分に向けて どんなことをがんばってきたか書きましょう！	達成感 色をぬりましょう。	☆☆☆☆☆☆	
お家の人から	先生から		

図2-3 キャリア・パスポート 5年 学年おわり

キャリア・パスポートの実践については、特別活動の学級活動(3)アの活動の時間を活用する。学

級活動(3)の内容について以下のように示されている。(12)

(3)一人一人のキャリア形成と自己実現  
ア 現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成  
学級や学校での生活づくりに主体的に関わり、自己を生かそうとするとともに、希望や目標をもち、その実現に向けて日常生活をよりよくしようとする事

具体的には、学級活動(3)の1時間の学習過程を課題の把握(つかむ)②可能性への気づき(原因の追究)(さぐる)③解決方法等の話し合い(見つける)④個人目標の意思決定(決める)として示している。そのプロセスを基にキャリア・パスポートの学習の過程については、以下の通りである。

(13)

①課題の把握(つかむ)

将来と今のつながりや学習する意義などについての課題やキャリア・パスポートを書く意義について考え課題をつかむ。

②可能性への気づき(原因の追究)(さぐる)

キャリア・パスポートを書くにあたって、これまでの自分を振り返る。また、「なりたい自分」について自分の願いをもち、よさや可能性をさぐり、記入していく。

③解決方法等の話し合い(見つける)

キャリア・パスポートをもとに「なりたい自分」を追求するためにできることなどを出し合ってみつける。友だちとの交流によって、自分のよさについて考えられるようにする。

④個人目標の意思決定(決める)

友だちのアドバイスをもとに、なりたい自分になるために、自分に合った具体的な個人目標(内容や方法など)を決め、実行への強い決意をもつ。

4つの段階の学習過程を重視し、児童のよさを認め合ったり、話し合ったりして、個々の考えや可能性を広げ、意思決定のもと強い決意をもって実践できるようにすることが大切である。

キャリア・パスポートでは学んだことや自分の成長を記録し、自己を見つめることで、将来の夢や目標を見つけて、それを叶えるための計画を立て、それに向かって進んでいく力を育成することを目指すのである。

(3) 成長ノートの実践

キャリア教育は学校全体を通して行うこととされているが、キャリア・パスポートははじめとおわ

りの間をつなぐ取組として本研究では、特に学校行事に注目し、「成長ノート」の取組を行うこととした。

学校行事に注目した理由の1つ目は、キャリア教育のねらいと学校行事のねらいに共通点が多いことである。(14)

学校行事 目標  
 全校又は学年の児童で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深め公共の精神を養いながら、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。  
 (下線部は筆者によるもの)

下線部に示したように、キャリア教育で付けた力と、基礎的・汎用的能力で示されている力に共通する部分が多く、まさに学校行事とキャリア教育のねらいには共通点が多いことがわかる。

2つ目は、学校行事では、子どもが自分の成長を実感できる場面が多いことである。子ども自身が自分の成長を実感し、「成長ノート」に自分の成長を書きためておき、キャリア・パスポート終わりにつなげられるようにする。

そこで、学校行事をつなぐために「成長ノート」を作成した。図2-4がその「成長ノート」である。

行事	 令和元年7月4日～	 令和元年10月12日	 令和元年11月20日	 令和2年1月17日	 令和2年3月23日
学年のめあて・スローガン					
わたしのめあて					
わたしのふりかえり					
友だちからのメッセージ					

図2-4 学校行事でつなぐ 「成長ノート」

学年のめあて・スローガンでは、行事ごとの全校目標やスローガン、学年目標を記入し、学校全体の動きを意識させるようにする。

「わたしのめあて」では、キャリア・パスポートで考えた、1年間のなりたい自分を意識し、行事ごとの「なりたい自分の姿」を考え、めあてとして記入する。

「わたしのふりかえり」では、行事ごとでのなりたい自分の姿を振り返るとともに、キャリア・パスポートはじめて考えた1年間のなりたい自分を行事での成長(課題)に結びつけてを振り返る

ことで、客観的に自分を見ていく力を育てるようにする。

学校行事の振り返りを1枚のシートにすることで、次の活動や1年間の活動についての見直しをもつことができると考えた。後日、子どもが振り返りを読み返した時に、自分ががんばったことやできるようになったことを振り返ることで、自分に自信をもち、次の活動でも挑戦したいという意欲が湧くし、学校行事での自分の成長の記録をためていくことができると考える。このようにすることで自分が付けた力をつなげていくことができる。これらを通し、キャリア形成が促されるか検証していく。

## 第2節 多角的視点から自己理解を促す方策

本研究では、基礎的・汎用的能力の中で、特に「自己理解能力」に注目すると述べた。キャリア・パスポートや「成長ノート」は自己理解を深めるためのものとして有効だと考える。これまでの自分を振り返り、今の自分を見つめ、将来の自分を描くことから、自分のやりたいことや得意なこと、やってみたいことなど見つけていく。最後には、1年間の自己の成長やがんばり等を振り返ることで自己理解を深めることができると考える。

しかし、自己評価だけでは、全ての子どもたちが自己を十分に評価できるとは限らない。そこで大切になるのは、他者からの評価である。他者からの肯定的な言葉がけは、自己についての気付きをもたらす大切なものになる。友だちからの評価は、新たな気付きや次への意欲へとつながるものとする。

特に高学年では、自己理解をすることで、それまで安定していた自己像が大きく揺らぎ、自分の存在価値を見いだせず、目標を見失いがちになることも予想される。また、自己開示に慎重になったり、大人の視点からは些細なことのように思える出来事をきっかけに自己嫌悪に陥ったりすることも考えられる。

そのため、これらの子どもたちにとっては、友だちの肯定的な言葉がけは、自信や意欲につながり、「自己肯定感」を高めるきっかけになると考える。また、友だちからだけでなく、教師からの言葉がけは自己評価を助け、自分の目標を見直すきっかけになり、大切になってくる。しかし、注意すべきは声かけの仕方である。「こうしたらよい」「こうするべき」など指示的な言葉がけにするの

ではなく、子どもたちが自ら気付くようにすることこそ重要であると考え。

- (10) 前掲(1) P. 185  
 (11) 文部科学省「キャリア・パスポート」について  
 2020年3月29日  
 (12) 小学校学習指導要領 解説 特別活動編 東洋館出版  
 2019年2月28日  
 (13) 前掲(12) P. 46  
 (14) 前掲(12) P. 116

### 第3章 実践について

本研究の実践は、A校は2年生と5年生、B校では5年生で実施した。

#### 第1節 キャリア・パスポート はじめ

キャリア・パスポートはじめでは、今の自分についてと、なりたい自分について考えた。また、なりたい自分に向けて頑張りたいことや挑戦したいこと等を具体的に考え、そのことから自分がしたいことを意思決定し、実践までつなげられるようにした。

#### ○キャリア・パスポートを

##### 活用する意義についての共有

キャリア・パスポートはじめを書く前に、これまで自分について考えた経験やなりたい自分について目標を考えた経験について振り返り、キャリア・パスポートを活用する意義について考えた。以下は子どもたちと共有した内容である。

子どもたちと共有したこと

- ・自分の成長に気づくことができること。
- ・なりたい自分に向けて挑戦する力が付くこと。
- ・自分らしく活躍するためには大切な力(基礎的・汎用的能力)があること。
- ・目標に向かって努力することのよさに気付くこと。

ただ、単にキャリア・パスポートを書くのではなく、目標に向かって努力し、そのことを振り返ることのよさについて共有することで、キャリア・パスポートの使用効果が高くなる。子どもたちのこれまで、めあてと振り返りを行ってきた経験を生かして、キャリア・パスポートの取組を有効に

活用し、なりたい自分に向けて活用できるようになることにつなげたい。

#### ○キャリア・パスポート「自分について」

「自分について」の項目では、これまでの活動や思い出などを振り返り、これまでの自分や今の自分について考え、書くようにした。図3-1が5年生の記述内容である。

図3-1 5年 キャリア・パスポートはじめ

##### 「自分について」

「自分について」を書くにあたっては、前年度の活動の写真をしたり、出来事や思い出などを話し合ったりした。そのことから活動中の自分について考えたり、交流したりすることで、今の自分について考え、書くことができた。その活動を行うことで、今の自分について考えることができた。

しかし、自分について書く場面では、2年生、5年生ともに、これまでの自分や今の自分について振り返り、キャリア・パスポートはじめに書くことが難しく、時間のかかる子どももいた。無理に書かせることで、本来の自分の思いを書くことができなかったのでは、本来のキャリア教育でねらう自己理解とは違う。そのために、授業時間内で書けない子どもに関しては、後日改めて時間を設定し、書かせるようにした。

#### ○キャリア・パスポート「なりたい自分」

「なりたい自分」の項目では、子どもが将来なりたい自分について考え、記述した。

「なりたい自分」を考える際、なりたい自分となると漠然としていて子どもたちは考えにくいことが予想される。そこで、将来なりたい自分については、1年後(次の学年)の姿を考えることで、少しでも具体的なイメージをもちやすくするようにした。

2年生では、1年間を通して、1年生との関わりが多いことが予想されることから、どんなお兄

さん・お姉さんがよいかをみんなで考えた。その中で、前年度、自分たちにかかわってくれた2年生の姿を振り返る子どもの姿も見られた。そのことで自分の理想の2年生像を具体的に考えることができ、なりたい自分を考える支援となった。

5年生は、1年後の姿となると小学校では、最高学年となる。そのため、学校のリーダーをして他学年の子どもたちをリードする場面が増えることが多い。そこで、「なりたい自分」を考える際、学校のリーダーとしてどのようになりたいかについてイメージを共有し、1年後のなりたい自分について考えた。自校に6年生のモデルの姿があることや、5年生はこれまで6年生とかかわった経験を振り返り、なりたい6年生について考えることができた。また、5年生の段階から学校のリーダーについて考えることは大変重要である。1年間を通して、どんな6年生になりたいかを考え続け、理想に向けて努力することにつながった。

○キャリア・パスポート「なりたい自分にむけて、頑張ること」

なりたい自分を考えた後に、子どもが「そのために頑張ること」や「チャレンジしたいこと」などについて考え、記述した。

2年生では、「なりたい自分」についてや「そのために頑張ること」について考え、友だちと交流をした。何度も自分の考えを発表したり、友だちの発表を聞いたりすることで、自分の考えが明確なものとなり、より具体的な目標を立てられるようになった。図3-2は子どもが考えた目標である。

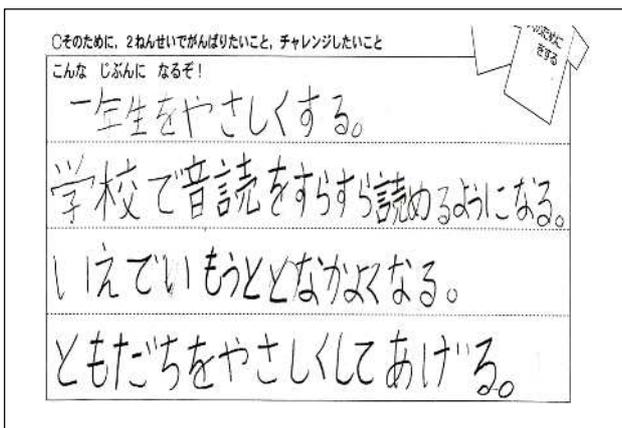


図3-2 2年 キャリア・パスポートはじめ

「自分について」

また、友だちの頑張ることについて、真似したいと思ったことについては自分のキャリア・パスポートはじめに加筆してよいことにした。

考えた「そのために頑張ること」については、よりよく活用するために、教室に掲示するようにした。ただ、目標を立てるだけで終わらず、毎日意識して実践できるようにした。

5年生でも、なりたい自分にむけて、「そのために頑張ること」を考える際、自分で計画して考えることや友だちとの交流の時間を大切にして実践につなげるようにした。交流を通して友だち同士でアドバイスをするようにしたことは、いろいろな人からのアドバイスをもらうことにつながり、自分では気付かなかったことややりたいことを気付くことにつながった。また、自分に合った意見などを参考にして、付け足したり、さらに考えたりする姿が見られた。

図3-3は、友だちからのアドバイスで「そのためにすること」に書きためていったものである。

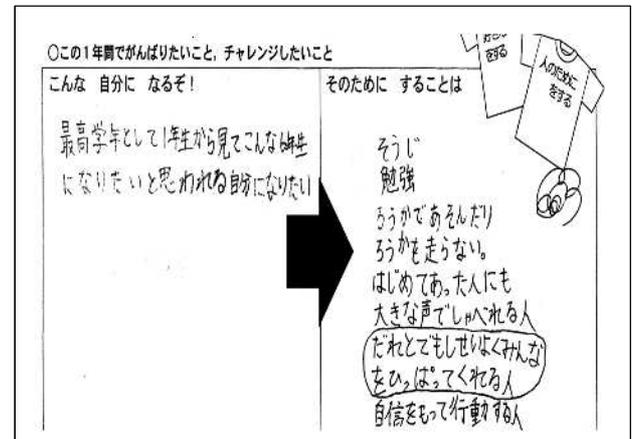


図3-3 5年 キャリア・パスポートはじめ なりたい自分について

友だちとの交流活動を取り入れることで、「○○の場面で頑張れそう」「○○で力が付きそう」など、いろいろな気づきがでてきた。このことが1年間の見通しをもち、計画的になりたい自分になるための計画を立てることもつながった。

その中から、「これなら頑張れそう」「やってみたい」「挑戦したい」などのものを自分で選び、図3-3のように丸で囲み、意思決定し、実践へとつなげた。

実践の際、繰り返し活動を行っていく中で、なりたい自分やそのために頑張ることが達成したり、増えたり、変化したりする子どもがいる。その際は、目標を加筆したり、修正したりするようにした。このように、キャリア・パスポートはじめを有効に活用し、なりたい自分に向けて計画をすることができた。

## 第2節 学校行事でつなげる 成長ノート

「成長ノート」では、学校行事ごとに、自分のめあてを考えて、自分の成長したことについて振り返り、どんな力が付いたかを書きためていく。

そのため、「成長ノート」を使った実践では、めあてを考える場面は学校行事のはじめの時間、振り返りの場面は、学校行事の活動の振り返りの時間を活用した。

### (1) 学校行事で付けたい力を明確に

教師と子どもたちが学校行事で付けたい力やキャリア教育で付けたい力などの目標を考え、共有することはとても大切である。そのため、各学校行事の活動はじめに学年で学年集会を開き、付けたい力を共有し、活動を行った。

5年生では、学校行事の活動を見通し、学校行事で付けたい力やキャリア教育で付けたい力を子どもたちと共有した。

次に、どのような場面で力が付くのか具体的な場面を考えた。具体的にどのような場面で力を伸ばしていくかイメージを膨らますことで、一つ一つの学習が意味のあるものになると考える。

これら付けたい力について共有したことや具体的な場面を考えることで、学校行事の学習を見通すことができ、子どもたちはどの場面で自分が付けたい力を育成できるか考えることができた。

決めた目標を基に、子どもたちは、学校行事でなりたい自分の目標を考えた。活動を通して自分はどんなことを頑張りたいか、どんな力を伸ばしたいか等を考え自分の目標とした。

### (2) 成長ノートで振り返る

学校行事の活動の振り返りの時間を活用し、活動を通して自分が頑張ったこと、挑戦したこと等について振り返り、「成長ノート」へ書き残した。

振り返りを行う前に、活動中に頑張っていたことやすごいと思ったことについて友だちと交流した。

学校行事で成長したことについて「成長ノート」で書きためていき、キャリア・パスポートおわりにつなげられるようにする。そのため、自分自身がどのようなことを意識し、どんな力が付いたかを実感とともに書き記すことができるように活動全体を振り返ったり、肯定的な言葉がけの取組をしたりした。

### ○活動全体を振り返る

学校行事の振り返りをする際、子どもたちの多くは、学校行事の本番だけに注目し振り返ることが多い。しかし、「成長ノート」の振り返りを充実したものにするためには、活動全体を振り返ることが大切であると考えた。

子どもたちの成長は活動の本番のみではなく、成長の多くは、活動の過程にたくさんあると考えられる。そのことを子どもたちにも実感をもたせ、「成長ノート」で振り返りを行えるようにした。そこで、活動全体を振り返る際、活動の過程の様子が振り返られるように活動の練習の様子の写真を見返した。図3-4は写真で練習中の写真を見返しているところである。



図3-4 学校行事の過程を写真で振り返る

このように写真を使って活動の過程を振り返ることで、子どもたちは「最初はできていなかったけど、今はできるようになった」「この時、うまくいかなかったよな」など、活動中の様子についてつぶやきながら振り返ることができた。

また、写真だけではなく、例えば運動会の振り返りでは、体育ノートの振り返りを活用することで、活動全体での成長を振り返る手立てにもなった。

これらを活動の振り返りを行う前に入れることで、子どもたちは自分の成長した場面として、学校行事本番だけではなく、活動の過程でもたくさん成長したことに気付けた。

### ○友だちからの肯定的な言葉がけの交流

さらに自分の成長を実感するために、友だちからの肯定的な言葉がけの交流を行った。活動中、友だちについて「頑張ったと思ったこと」や「すごいと思ったこと」などについて付箋で書き、図3-5のように交流を行った。



図 3-5 肯定的な言葉がけの交流

2年生では、以下のような言葉がけをもらった。

- ・練習の時から頑張っていたね。
- ・〇〇の工夫をされていてすごいね。
- ・〇〇が上手だったね。
- ・いっぱい練習してすごいね。
- ・楽しそうで私も真似したいです。 など

5年生では以下のような言葉がけをもらった。

- ・練習手伝ってくれてありがとう。
- ・〇〇さんがいてくれてよかったです。
- ・みんなのお手本になっていてすごい。
- ・教えてくれてありがとう。
- ・あきらめずに何度も練習しているところがすごい。 など

2年生と5年生ともに活動中の頑張りや成長について認めるような言葉がけをもらう様子が見られた。子どもたちの多くは、もらった言葉がけを嬉しそうに何度も読み返す姿が見られ、肯定的な自己理解につながっていった。

### ○教師からの肯定的な言葉がけ

肯定的な言葉がけの活動は、子ども同士だけではなく、教師や保護者などからの大人からの言葉がけも効果的であると考えられる。図3-6は肯定的な言葉がけの交流の際に、教師が子どもに声かけをしている様子である。

「先生も、この時見ていたよ。すごく頑張っていたね」「あの時、みんなと何回も練習していたね」など、子どもの頑張りや成長などについて大人が価値付けることによって、子ども自身が成長を実感し、自信をもつ子どもの姿が多く見られた。そのことで自分の成長に自信をもち、活動の中で成長したことを生かして、次の活動でも実践している姿が見られた。



図 3-6 教師による肯定的な言葉がけ

また、更なる成長へつなげるためには、教師が「成長ノート」への言葉がけ(コメント)をすることも効果がある。

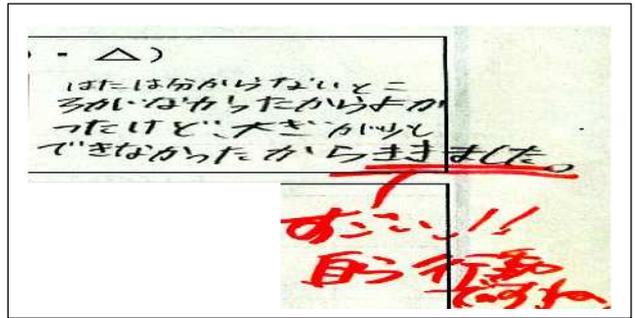


図 3-7 5年 行動についてほめる

子どもが運動会の組体操の練習について書いている振り返りである。自分は練習でうまくいかなかったので、「……できなかったからききました」と、うまくいっている友だちに聞きに行ったことについて振り返りを書いている。

そこで教師はできるようになったことやできなかったことを評価するのではなく「すごい!!自ら行動ですね」と聞きに行った行動そのものについて評価をしているのである。

教師は、ゴールの姿に対して、結果としてできたこと、できなかったことだけ进行评估することが多い。しかし、それらだけ进行评估のではなく、こうした、子どもたちのできるようになるための頑張りや挑戦などについても評価をすることで、更なる意欲につながると考えられる。

図3-8は子どもが自分の成長について「はんぶんくらいできてうれしかったです」と振り返っている。教師は、その半分の成長を「はんぶんでも大きな成長!よくがんばっているね」と肯定的に評価している。

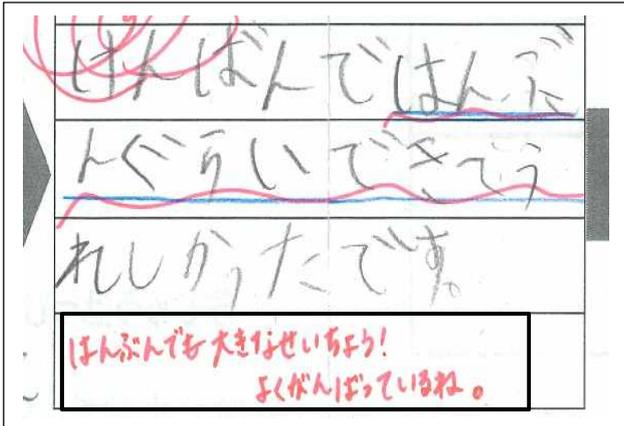


図 3-8 2年 子どものありのままを認める

このように、完璧にできたということよりも、少しの成長を感じられたり、少しの成長でも成長だと気付いたりするには、こうした教師の肯定的な言葉がけや肯定的なもののとらえ方が大切になってくる。子どもが感じたことに対して、できていないことをできるようになるためのアドバイスをするだけではなく、少しの成長に気づき、声かけすることが大切である。

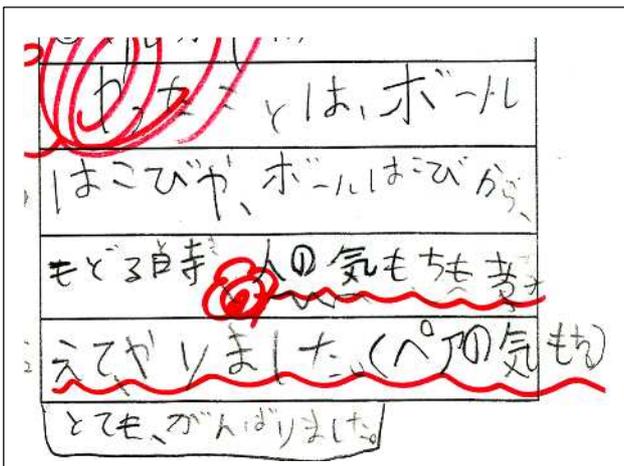


図 3-9 2年 子どものありのままを認める

肯定的な言葉がけだけではなく、こうした子ども自身が成長だと思った記述に対して図3-10のように波線を引き、意識づけ、価値づけることも重要である。そのことで子どもは自分の成長に自信をもち、次の活動でも獲得した力を発揮している姿が見られた。

こうした教師からの言葉がけのほかにも、保護者や地域の人などの大人からの肯定的な言葉がけは有効であると考えられる。

○自分について振り返る。

活動全体の振り返りや友だちとの交流を基に、活動での自分の成長を考え、「成長ノート」で振り返った。また、振り返りを行う際、活動のはじめ

に立てためあてを読み返し、めあてをもとに振り返ることができるようにした。以下は、「成長ノート」における具体的な記述である。

◇自分の成長を蓄積していく

2年生、5年生ともに振り返りでは、「〇〇の力が付いた」「〇〇のことができるようになった。(成長した)」など、自分の成長について書きためる子どもが多かった。

2年生では、付けた力だけではなく、活動のはじめの姿と比べて振り返っている子どもの姿が見られた。図3-10は活動のはじめの姿と比べて振り返りを行っているものである。

行事	うんどう会 令和元年10月12日
わたしのめあて	ダンスで見本を見せてあげたい
わたしのふりかえり	<p>フラフープはさいしょはそんなにはやくとべてなかつたけどいっしょに休みじかんにともだちといっしょにれんしゅうしたから一番をとれた。</p>

図 3-10 2年 活動のはじめと比べて振り返る

また、5年生では、付けた力についてまとめて書いている様子が見られた。

図3-11では、学校行事で取り組んだことを振り返り、その場面や出来事について思い出し、「〇〇の力が付いた」ことを書きためている。これらは、学校行事を通して、自分が付けた力を「成長ノート」に蓄積し、キャリア・パスポートおわりへとつなげられるようになっていく。

行事	花巻山のま ちっか カ 令和元年7月4日～	運動会 やり とける 令和元年10月12日
学年のめあて スローガン	1人1人実力を伸ばすのが よく活動しよう	全力→達成感
わたしのめあて	つかりて空高くということ をわすれずに、がんばりたい。	今までがんばってきたが 最後まで一生懸命に やる達成感を味わう。
わたしのふりかえり	ぼくは自然・協力が大切 なと思いました。また自然 ばか喜びすると思えること と自然の力が自然の力を 活かすことが大事だと思 います。早くいそいそと がんばりたいです。	ぼくは運動会をがんばって たやりとけるの思いと みんなの応援のありがた いことを思い出しました。 最後までがんばった 達成感を味わうことが できました。

図 3-11 5年 自分の成長を蓄積している「成長ノート」

「成長ノート」の行事の項目欄には行事名と実施した日時もしくは期間があらかじめ記載してある。行事名を記載したTシャツの絵の中に、行事の終了後に一言で自分の成長を記入した。自分の成長を一目でわかるように工夫をしている。このように「成長ノート」では、自分の活動を振り返るだけでなく、活動を通してできたことや付いた力なども振り返ることができるようにした。

◇前回の活動の振り返りから

次のめあてへとつなげる

これらの振り返りは、次の活動のめあてへとつなげることが大切である。

行事	運動会 令和元年7月4日～	運動会 令和元年10月12日	学習発表会 令和元年11月20日	スキー・登山・トシチャイ 令和2年1月17日	卒業式 令和2年3月23日
前回のめあて 次回へつなげる					
振り返りのめあて	繰り返し行う				
振り返りの ふりかえり					
前回のめあて メッセージ					

図 3-12 「成長ノート」 振り返りから次のめあてに

振り返りの際、付けた力をどんな場面で活かせるかを考えさせると、次の活動につながると考えられる。また、めあてを考える際に、これまでの振り返りを読み返すことで、今までの自分の成長について知り、それが次のめあてにつながって行く。

2年生の振り返りでは、運動会で「みんなと協力すること」をめあてとして活動し、振り返りを行った。

振り返りでは、「ころを一つにできた」と成長を実感していると同時に、「じぶんのできていないところがわかった」ことを振り返っている。

それらを活かして、次の学習発表会のめあてでも「みんなと協力すること」を選択した。学習発表会での活動では、運動会でできなかった「困っている友だちに声をかける」ことを積極的に行い「協力する力」を高めている様子が見られた。

このことから、学習発表会での振り返りでは、「協力できた」ことを実感していることがわかった。

図 3-13 は「成長ノート」の記述である。

うらなとう会 令和元年10月12日	学習発表会 令和元年11月20日
みんなと協力してダンスをもう一つ上げてたいです!!	みんなと協力してダンスをもう一つ上げてたいです!!
じぶんのできていないところがわかった。	みんなだけじゃなく、自分も頑張りたいです!!
大きくおどって	いきました。はくしゅも、いじゅも
ころを一つにできたと思います。	うらなとう会では、みんなと協力してダンスをもう一つ上げてたいです!!

図 3-13 2年 「成長ノート」

この記述では、次の活動で、前回付けた力を活かそうとしている様子が見られる。

5年生では、学校行事を通して、なりたい自分に向けて、段階を追って自分の力を高めている子どもの姿があった。その子どもは、「成長ノート」を書く時に前の活動での振り返りを読み返したり、キャリア・パスポートはじめて書いた、なりたい自分や活動前の様子を確認したりして、振り返りをしていた。

この1年間でがんばりたいこと、チャレンジしたいこと

こんな自分になるぞ!

人のことを考えて行動する  
自分になりたい。(なりたい人が)

みんなを助ける人になりたい

そのためにすることは、人のことを考えて行動する、人を助ける人になる。ふだんから、人の気持ちを考える。

そのために今からできるようにがんばる。

図 3-14 5年 キャリア・パスポートはじめ

図 3-14 のようにキャリア・パスポートはじめて「みんなのことをひっぱる人になりたい」「人のことを考えて行動する」自分になりたいという記述があった。

図 3-15 は、その児童の「成長ノート」の振り返りである。宿泊学習では、困っている児童がいると声をかけをしたり、手伝ったりしたりするなど、グループの仲間と「協力」できたことを実感し活動を終えた。

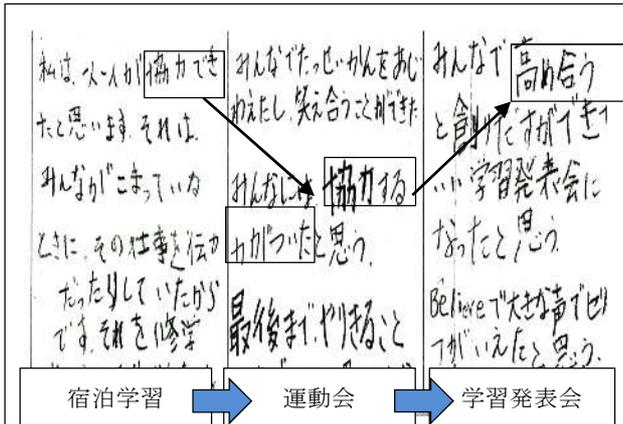


図3-15 5年 「成長ノート」での変容の様子

運動会の振り返りでは、「みんなには、協力する力がついたと思う」との記述が見られた。この児童自身も、実感を伴い成長したことを記述している。学習発表会でも、さらに「協力」の質を高め実践している姿がみられた。

また、めあてで書いた「人のことを考えて行動する自分になりたい」という、なりたい自分を目指して学校行事に取り組んだ様子が見られた。

第2節の(1)本研究の全体像の中で示したように、「自己肯定感」を高めるプロセスとして、「自己理解能力」の向上が大切になってくる。この「成長ノート」では、めあてと振り返りを繰り返し行うことで、振り返ったことをもとにして新たなめあてを設定することになる。この過程で「自分は何なことができるようになったのか」という自己理解をもとに「よりよい自分になるために、次の活動ではどのようなめあてにすればよいか」を考える手掛かりがたくさんもてるようになる。

一方、肯定的な言葉がけでは、自分自身では気付いていないかもしれないことが明らかになることもある。友だちや周りの大人に指摘されることによって、改めて気づくこともある。

これらが相まって「自己理解能力」が高まっていったと考えられる。

### 第3節 キャリア・パスポート おわり

キャリア・パスポートおわりでは、子どもが1年間の自分の成長や自分の頑張りについて考え、記述する。キャリア・パスポートはじめと比べ、さらなる成長のため、次の学年でさらに頑張りたいことについて考える。

今年度の研究では、12月に通常年度末に行うキャリア・パスポートおわりを行ったため、今年度の残りの日でさらに頑張りたいことを考えた。

### ○キャリア・パスポートおわり 自分の成長したことについて、忘れられない、残しておきたい(思い出・出来事・出会い)について

1年間の自分の成長について振り返り、キャリア・パスポートおわりに書き記した。1年間の自分の成長を振り返る際、多くの子どもたちは、「成長ノート」を読み返し、自分の成長について振り返る姿が見られた。今回用いた「成長ノート」のよさは、年間の活動を一枚のシートにしたことで、一目で1年間の自分の変容が見られることにある。

小学生の子どもたちにとって、活動ごとの振り返りを残しておくだけではなく、それを1枚のシートにする意味はキャリア・パスポートおわりを書く時に振り返りをいちいち見返さなくても、シートになっていれば容易に年間の振り返りができる。また、シートに整理することによって年間のつながりが見えやすくなる。

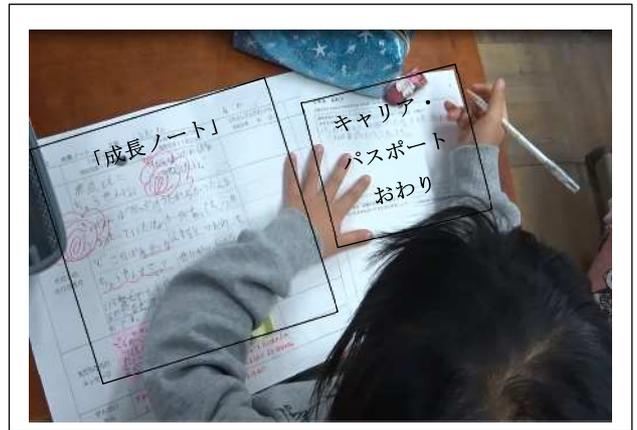


図3-16 2年 キャリア・パスポートおわりの様子

2年生が振り返りを行っている場面で、「成長ノート」を1枚のシートで年間を振り返りを行うことで、1年間の自分の成長を実感するとともに、キャリア・パスポートおわりへの記述内容が豊かになったと考えられる。また、自分の成長に自信がない子どもも、肯定的なメッセージを読み返すことで、自分の成長に自信をもち、自信をもって振り返り、書き残す子どもの姿が見られた。

### ○さらなる成長に向けて

1年間の「成長ノート」から見取れる自分の成長の喜びから、自信や自己有用感が得られた。そこから得られた意欲をさらに次の学年での取組につなげようとする姿も見られた。

キャリア・パスポートおわりの「こんな自分になるぞ」は、キャリア・パスポートはじめて記述したことを振り返り、「なりたい自分(次の学年の

姿)」になるために、次の学年で、頑張りたいこと、挑戦したいことについて考え、交流した。そこでは、図3-17「5年キャリア・パスポートおわりの様子」のようにキャリア・パスポートはじめて考えた「なりたい自分」と変容している子どもがいた。

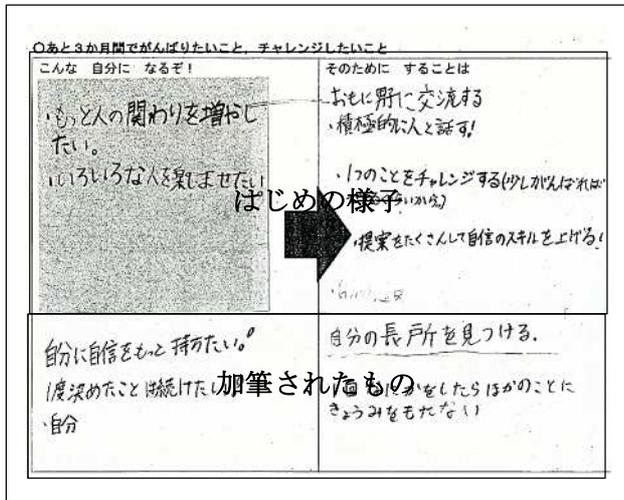


図3-17 5年 キャリア・パスポートおわりの様子

教師は、変容についても自分の成長だと認めて、加筆するように声かけをした。

「そのためにがんばること」については、自分について考えることや友だちとの交流を通して、①友だちに聞いてもらうことや②友だちの頑張ることを聞くことで「自分のそのためにすること」のところに書き加えるようにした。5年生では、交流の際、アドバイスしあっている様子やなりたい自分について実践している人にインタビューをする姿が見られた。その中から、次年度自分が挑戦したいことや頑張りたいことなどについて意思決定し、実践へとつなげられるようにした。

## 第4章 研究の成果と今後の課題

### 第1節 研究の成果・今後の課題について

#### (1) 児童の実態から

#### ○肯定的な言葉がけの成果

肯定的な言葉がけの取組を行った後に、子どもたちに記述式のアンケートとインタビューを行った。それらを基に、自己理解の深まりについて検証した。

2年生のA児の学習発表会での様子については、学習発表会での活動のめあてを「苦手なことにも

挑戦すること」としていた。活動中、自分の苦手な「人の前で発表すること」を克服するために、様々な場面で取り組んでいる姿が見られた。インタビューでは、このようなことを話していた。

「動きや声が大きくて遠くまで届いていたよ」という言葉がうれしかったです。わけは、自分はこのことが苦手だったし、最初はできなかったけど、どんどん成長したことがわかりました。

図4-1 2年A児 肯定的な言葉がけをもらった感想

このように、肯定的な言葉がけをもらうことで、自分がめあてとしていたことが達成したことを実感することができた。また、自分は頑張れた、成長したことができたと感じていた。それらが、よりよく自己理解を深めていくことにつながった。それが、その後の活動でも自信をもって発表する姿として表れてきた。

また、5年生でも、肯定的な言葉がけをもらうことで、自分の成長を実感し自信を深めている子どもの姿が見られた。

ぼくは、「動きの工夫を頑張っていたね」「大きい声だったよ」のメッセージがうれしかったです。理由は、あまり大きな声を出したり、動きをつけて話したりすることがあまり得意でなかったけど、今回学習発表会を通してできたし、それに気づかせてくれた言葉なのでうれしかったです。

図4-2 5年B児 肯定的な言葉がけをもらった感想

5年生のC児の宿泊学習での様子について述べると、宿泊学習での活動のめあてを「友だちのことを考えて行動する」をしていた。活動中、リーダーとして困っている友だちに声をかけたり、係の仕事のアドバイスや提案などを積極的に行っていたりする姿が見られた。肯定的な言葉がけでのインタビューでは、以下の文のように

私は、「係の仕事でアドバイスしてくれてありがとうございます」という言葉がとても自信になりました。どうしてかというと、自分では、役に立っているのか不安だったけど、こうしたメッセージをもらうことで自分は「役に立った」のだとわかったからです。これからもやっていきたいと思います。

図4-3 5年C児 肯定的な言葉がけをもらった感想

このように、肯定的な言葉がけをもらうことで、自分の頑張りについて実感し、自己理解を深めた。そのことで自分は人の役に立ったのだと実感し、自己有用感を感じている様子が見られた。また、次の活動の意欲になり、さらに高めようとしている様子が見られた。

また2年生では、自分について振り返る活動を通して、自分の存在価値について考えることも多くみられる。

「〇〇くんがいなかったら、はじまらなかったよ」の言葉がうれしかったです。どうしてかという、学習発表会で忙しかったけど、出ないことを選んだらみんなが困ったかもしれないし、出てよかったです。

**図 4-4 2年D児 肯定的な言葉がけをもらったの感想**  
 図 4-4 のように、なりたい自分に向けてがんばっていることを認めてもらうことは、子どもたちにとって大変うれしいことである。活動を通して、自分の活躍を認めてもらうことでは大変重要である。1人1人の役割をもち、その中で努力したことを認めてもらうことは子どもにとってはとても効果があった。

「練習をたくさんしていて上手になったね」の言葉がうれしかったです。自分は、「練習していてよかった」と思いました。うれしく思いました。がんばったかいがありました。

**図 4-5 2年E児 肯定的な言葉がけをもらったの感想**  
 肯定的な言葉がけは、ただ単にほめるのではない。子どもたち一人一人の目標である、なりたい自分に向けての頑張りや挑戦したことについて、努力したことについてほめることが大切である。それと同時に、その子自身の存在について認めることも大切であると考え。これは、自分の成長について実感をもつと同時に自分の頑張りについて肯定的にとらえられるようになると考えられた。また、それらの活動を通して子ども一人一人が自信をもち、「自己肯定感」を高められることにつながった。  
 これらは、他の子どもたちからも同様に感じている姿が見られた。そのことから、肯定的な言葉がけは、「自己肯定感」を高めるものとして有効であると考えられる。

**○キャリア・パスポートおわりの様子**

子どもたちは「成長ノート」を活用し、1年間の自分の成長について振り返りを行った。

学校行事で自分の成長を実感し、「成長ノート」で振り返りを行うことで自己理解を深めていることがわかる。そのことから、「成長ノート」での振り返りは、キャリア・パスポートおわりにつながるものとして有効であると考えられる。

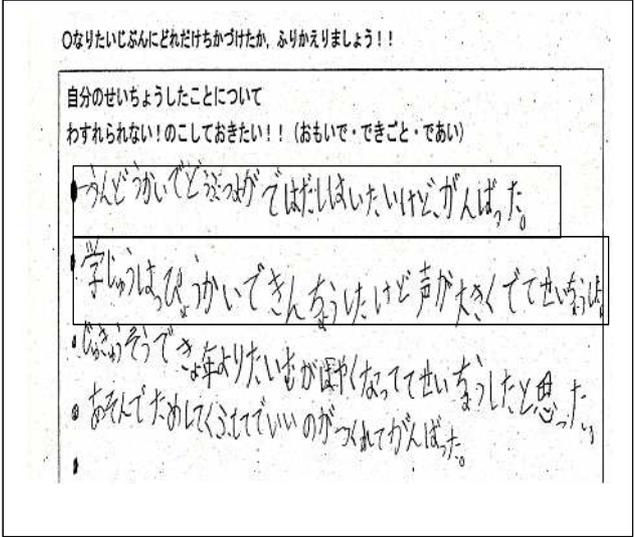


図 4-6 2年 キャリア・パスポートおわり

**(2) 児童アンケートから**

研究のサブテーマに挙げている、「自己肯定感」の高まりについて、児童アンケート結果から検証した。アンケートでは、いくつかの項目を作成したが、特に「好きなものや得意なこと」「自分にはよいところがある」の項目に注目した。なお、アンケートは実践前と実践後に実施した。

2年生児童では、1クラス22人を対象に実施した。

まず、「自分には得意なことはありますか」の項目の結果についてである。

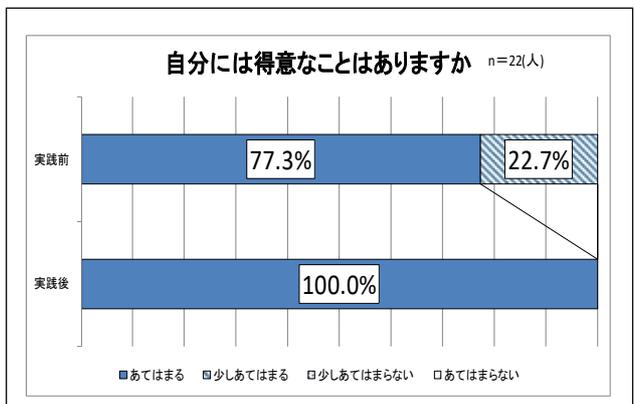


図 4-7 2年「自分には得意なことがありますか」

実践前では「あてはまる」が77.3%「少しあてはまる」が22.7%であり、実践前から肯定的な回答が多く見られた。

実践後では、「あてはまる」が100%に変化した。

次に、「自分にはよいところがありますか」の項目の結果についてである。

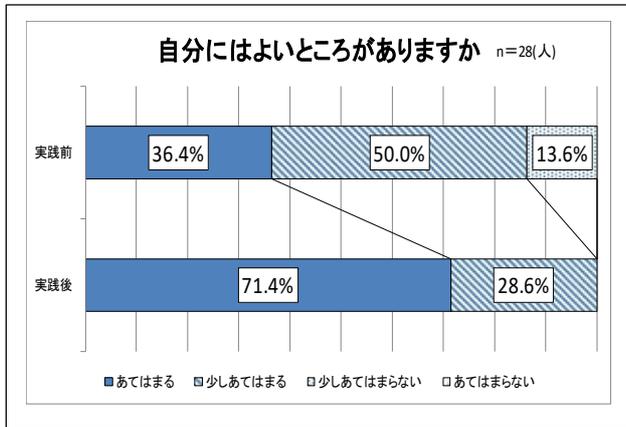


図 4-8 2年「自分にはよいところがありますか」

実践前では「あてはまる」が36.4%「少しあてはまる」が50%と肯定的な回答が86.4%「少しあてはまらない」の否定的な回答が13.6%であった。

実践後では「あてはまる」が71.4%「少しあてはまる」が28.6%に変化し、肯定的な回答が100%になった。

これらの結果から2年生では、キャリア・パスポートはじめて自分について正しく知り、学校行事の活動を通して、自分のできることが増えたり、友だちや教師などから肯定的な言葉がけをもらったりすることにより、自分の成長を実感し、たくさん「できた」の回答がとと考えられる。

キャリア・パスポートおわりを書いている様子を見ている、「成長ノート」を使って、1年間を通して、自分は〇〇を頑張ったと実感をもてた子どもが多くいた。「成長ノート」で学校行事全体を振り返ったことで自分について考えることができたと考えられる。そのことから学校行事の活動やキャリア・パスポートを通して、自分のよさや好きなことを見つけて自信になり、「自己肯定感」を高めていけたと考えられる。

5年生児童では、2クラス52人を対象にアンケートを実施した。

まずは、「自分には得意なことはありますか」の項目の結果についてである。

5年生児童では、実践前では「あてはまる」が73.0%「少しあてはまる」が23.0%と肯定的な回答が96.0%である。また、「少しあてはまらない」

が3.6%「あてはまらない」が3.6%と否定的な回答が7.2%であった。

実践後では「あてはまる」が56.0%「少しあてはまる」が38.0%と肯定的な回答が94.0%である。

「少しあてはまらない」が3.6%「あてはまらない」が2.0%と否定的な回答が5.6%であった。

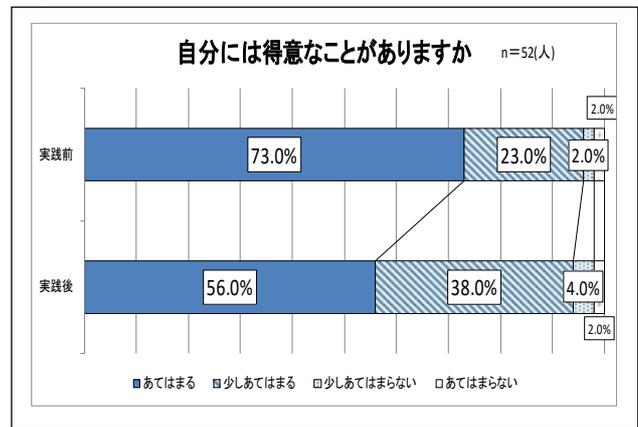


図 4-9 5年「自分には得意なことがありますか」

次に、「自分にはよいところがありますか」の項目の結果についてである。

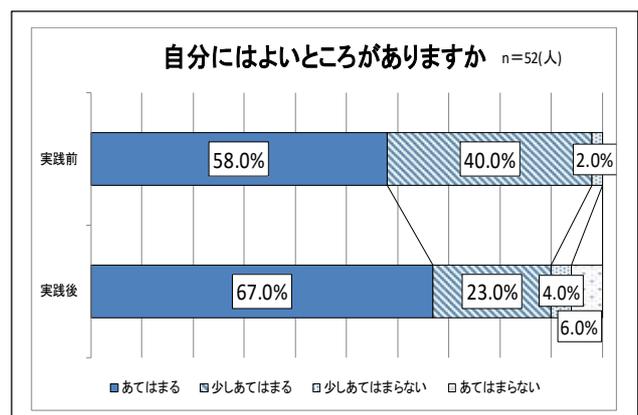


図 4-10 5年「自分にはよいところがありますか」

実践前では「あてはまる」が58.0%「少しあてはまる」が40.0%と肯定的な回答が98.0%であった。「少しあてはまらない」の否定的な回答が2.0%であった。

実践後では「あてはまる」が67.0%「少しあてはまる」が23.0%と肯定的な回答が90.0%であった。「少しあてはまらない」4.0%「あてはまらない」6.0%と否定的な回答が10.0%であった。

「自分にはよいところがありますか」の「あてはまる」の項目の数値が上昇したのは、肯定的な言葉がけの取組が有効であったことが考えられる。アンケートやインタビューからわかるように、友だちから、自分が頑張っていたことやよさについて言ってもらったことによって自信をもって「よいところ」があるとと言える子どもが育ったと考え

られる。しかし、両項目ともに「少しあてはまる」「あてはまらない」に変化したことにも注目したい。そのような子どもたちは、実践を通して、「自己理解能力」が高まり、自分を正しく見取れるようになってきたためではないかと考えられる。つまり、評価規準がその子どもの中で変化し、より厳しく自分を評価した結果であると考えられる。実際にキャリア・パスポートはじめを見直すと、なりたい自分について見直し、加筆している児童の姿が多く見られた。実践開始直後では、自分について深く考えられなかったり、なりたい自分についても考えられなかったりしたが、研究の取組を通して、自分の成長について考えることで、「自己理解能力」が高まり、正しい目標設定やなりたい自分像の高まりが見え、「自分のよさ」についての数値が下がったと考えることもできる。

また、自分の成長を厳しく評価する様子が見られた。そのため、このような結果になったと考えられる。しかしこれらは決してマイナスではなく自己理解を深めていく過程だと考えられる。この結果を受け止め、継続して教師が肯定的に指導したり、言葉がけをしたりすることで、子どもは自信をもつことができると考えられる。

これらのことは、結果を踏まえ、更なる「自己肯定感」の高まりについては課題が残る。

### (3) 研究協力員ヒアリングから

子どもたちは、キャリア・パスポートでなりたい自分について考えたり、「成長ノート」で学校行事ごとの自分のめあてを考えたり、肯定的な言葉がけの取組を行ったりしたことで、一人一人が自信をもって学校行事に取り組むことができるようになった。

そのことで、普段の学習においても、自信をもって発表する姿や、意欲的に学習に取り組む子どもの姿が見られた。なりたい自分に向けて頑張ることや、友だちや先生からなどから肯定的な言葉がけをもらうことで、子どもたちのやる気に変化が見られた。

これまでの学校行事の振り返りでは、学校行事当日の様子だけを振り返ることが多かったが、今回、「成長ノート」を活用し、これまで学校行事で成長したことについて振り返ることで、学校行事で取り組んだ活動の過程にも注目し、各時間身に付いたことについて振り返る姿が多く見られた。活動全体を意識することで、活動の成果のみに注目するのではなく、活動の全体で実践した自分た

ちの努力について振り返ることができる子どもたちが増えたと考えられる。

肯定的な言葉がけの取組で、友だちから自分の頑張っていたことを認めってもらったり、友だちの頑張っていたことを認めたりする活動をしたことによって、友だちの頑張りを認め合う集団になってきた。そのことで、自信をもって自分が成長したと言える子どもが多く見られた。こうして学校行事の振り返りを通して、自分についての、肯定的な自己理解の力が身に付いたと考えられる。この活動によって多くの子どもは「自己肯定感」を高めたのではないかと考える。

教師が「成長ノート」で子どもの頑張りを見取することで、子ども一人一人が今何に向かって頑張ろうとしているかが分かり、子どもの理解に役立った。子どもたちがどのように考えて行動しているのかがわかり、児童理解に役立った。それによって、子どもたち一人一人へのはげましの声や関わり方が具体的になったり、変化したりした。

この取組を通して、学校行事でのつながりや付けたい力について、学年の先生と考え、共有する時間をとるようになった。子どもたちに「どんな力を付ける」のか「この時間でこうしよう」など、計画的に学校行事を取り組めるようになった。

今回、キャリア・パスポートや「成長ノート」を活用し、個人懇談会の資料として提示した。

保護者には、子どもたちが今、「どんな自分になりたい」のか、そのために「どんなことをがんばっている」のかなど、資料を基に話すことができた。個人懇談会中に、キャリア・パスポートや「成長ノート」へはげましのコメントをもらうことができ、子どもたちへのはげましへとつながった。

個人懇談会后、保護者へインタビューを行ったところ、

「子どもが学校でどんなことをしているのかわからなかったけれども、キャリア・パスポートや「成長ノート」を見せていただいたことで、子どもの成長の変化がわかりやすかったことや、子どもの頑張りが分かった。」

「2年生でこんなに振り返りを書いているなんてすごいと思った。家で学校の様子について話す機会がないので、このような取組はとてありがたい。」

などの声をいただいた。また、共通して保護者か

らお話ししていただいたのは、友だちからの肯定的な言葉がけを見て「家でも、はげましの声をかけよう」ということがあった。

この研究での取組は、子どもが成長を実感し自己理解を深めるだけでなく、教師の授業や取組の改善や教師や保護者の児童(子ども)理解につながると言える。

## 第2節 さらに充実を求めて

実践を通して、キャリア・パスポートは小・中・高等学校と学年や校種を越えて自身の成長をつなぐ「縦のつながり」をより強力にするものとして有効であると感じた。これらは1年間の成長を蓄積し、次の学年へとつなぐことで可能になる。

そしてこれらのつながりをもたせるためには、本研究で行った「成長ノート」を活用することが有効である。「成長ノート」で、1年間を見直し、自分の成長について繰り返し振り返ることで「横のつながり」を強力なものとする。このような取組で横をつなぐことによって、結果縦のつながりが生まれてくるのである。

短期間ではあったが、これらの取組は、自分の成長について振り返ることや、「自己理解能力」や「自己肯定感」を高めるものとして有効であると考えられる。さらに、これらの取組を充実した取組にするには3つのことが大切であると考えられる。

### (1) 成長ノートの蓄積

学校行事では、成長ノートを活用し、前回の活動と比べて振り返ったり、活動を始める前と比べて振り返ったりすることで、より自分の成長について振り返ることができた。そのことによって、より自分の成長を実感できた。この取組をさらに充実した振り返りにするには、学年を超えて振り返られるように、成長ノートを蓄積することも有効である。蓄積することで、例えば、キャリア・パスポートからだけでは見えない振り返りができ、より自分の成長を実感することができるだろう。特に、他者からもらった肯定的な言葉がけを残しておいたりすることで、より効果的に自己理解を深めたり、自分の成長が蓄積されることが、自己肯定感の高まりへとつながっていくと考えられる。

### (2) 各教科・領域の振り返りと

#### 成長ノートをつなぐ

学校行事では、活動の本番だけではなく、活動の過程にも子ども自身が成長を実感する場面が多い。そのため、日常から自分の成長を書きためておくことは非常に大切である。

これと同様に、各教科・領域等の振り返りの際、教科で付けた力と同様に、キャリア教育で付けた力に関しても視点を絞った振り返りシートを作成することも考えられる。

このような取組を通して、子どもたちが自分の変容に気づき、自分の成長を実感できる手助けにつながっていくと考えられる。

### (3) 肯定的な言葉がけ

研究・実践を行う中で、肯定的な言葉がけは、子どもの「自己肯定感」を高める上で、大変重要な役割があることがわかった。それと同時に、肯定的な言葉がけについては、子ども一人一人にとって、いつ、どこで、どんな声かけが効果をもたらすかが違うことも分かった。そのため、いつ、どのような場面で、誰に、どんな言葉がけをもらうことが効果的であるかについての分析については、課題が残る。子ども同士が互いに「自己肯定感」を高め合うための様子については次年度の課題にしたい。

また、子どもたち同士での肯定的な言葉がけについてはとても効果がある様子が見られた。そのため、子どもたちに、研究で見えてきた視点で交流できるようにしていくこと効果があるのではないかと考えた。まずは教師がモデルとなり、効果的な言葉がけの視点でほめたり、コメントをしたりするなど、活動を繰り返すことで子どもたちが豊かに肯定的な言葉がけを知ることが1つの手段になるかもしれない。

## おわりに

本研究の趣旨を理解し、協力して下さった京都市立岩倉北小学校と京都市西大路小学校の校長先生をはじめ、自らの学級での姿を調査対象として協力して下さった研究協力員の先生方、いつも温かく迎えて下さった両小学校の教職員の皆様から感謝の意を表したい。